

未紀, 小. (2017). 教育格差の解消に挑む日本唯一のUWC校. 日経ビジネスオンライン. Retrieved 27 October 2017, from

<http://business.nikkeibp.co.jp/atcl/report/16/216911/101300004/?P=3&ST=smart>



教育格差の解消に挑む日本唯一のUWC校

第36回 「ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン」が始動



- 小林 りん
- 中西 未紀
- 2017年10月17日（火）
- バックナンバー

「インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢（ISAK）」は、ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）に加盟、2017年8月1日付で「ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン」に校名を変更した。

UWCは、159の国・地域で子供を選抜してUWCに加盟する高校に送り込む国際的な教育機関。本部はロンドンにあり、1962年の設立ですでに半世紀を超える歴史を持つ。加盟校がある地域は、イギリス、ドイツ、イタリア、オランダ、ノルウェー、ボスニア・ヘルツェゴビナ、アルメニア、南アフリカ、アメリカ、カナダ、コスタリカ、インド、タイ、シンガポール、中国、香港。17校目として、日本からUWC加盟校が誕生した。

代表理事の小林りんがUWCにコンタクトをとり始めたのは2014年の開校前、もう5年近く前のことになる（参考記事：『[教育の潮流は「社会にインパクトを与える人材の輩出」だ](#)』）。



学校法人ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン代表理事の小林りん

小林自身もカナダにあるUWCピアソン・カレッジで学んでおり、「多様な価値観のなかでお互いを認め合い、違いを乗り越えていく」というUWCが掲げるミッションに共鳴していた。

ついに実現したUWCへの加盟で、学校にどんな変化が起きているのか。また、UWCは日本校に何を期待するのか。

（これまでの経緯は[こちら](#)を参照）

2017年9月23日、軽井沢の全寮制インターナショナルスクール「ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン（UWC ISAK）」のキャンパスは、あでやかなドレスに身をまとう女子生徒にスーツでビシッと決めた男子生徒、着物や民族衣装を着る生徒で、華やいだ空気に包まれていた。この日は、ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）への加盟を祝う式典が開催された。これまでグリーンを基調としていたスクールカラーは、UWCに合わせてブルーに一新している。

「人生で重要なのは2日だけだ」

「今日は、私個人としても、とても特別な日です」

冒頭の挨拶で、代表理事の小林りんは自身が全額奨学生としてカナダのUWCピアソン・カレッジに入学したときの原体験を語った。最初は英語がほとんど話せなかったこと、そこで出会ったメキシコから来た友人の実家の質素な暮らしぶりに驚いたこと、そして、初めて足を踏み入れたスラム街で目の当たりにした世界の現実・・・。

「今でも、あの蒸し暑い夏の日の臭い、そして情景を鮮明に覚えています。裸同然で走り回る子供たち、シンナーを嗅いだり家の前に座り込んで宙を見つめたりしている大人たち。本や映画で知ってはいましたが、実際に貧困と格差に直面して、私はかつてない衝撃を受けました」

「私は、あの日、自分に巡ってきたすべての運は、自分のためではなく、社会の役に立てようと決意しました。『人生で重要なのは2日だけだ』と、私に言った人がいます。1日は、自分が生まれた日。もう1日は、自分の人生の目的を見つけた日です。メキシコを訪れた夏の日が、私にとっての『その日』になったのです」

会場は大きな拍手に包まれた。その列席者には、UWC会長であるヌール・アル＝フセイン王妃の代理として次女のラーイヤ・ビント・アル＝フセイン王女をはじめ、世界各地から訪れたUWC関係者、軽井沢町長の藤巻進、そしてUWC ISAKの理事や評議員、支援者の姿があった。



UWC加盟を喜ぶ、代表理事の小林（右から2人目）と発起人の谷家衛（左から2人目）

「UWCの一員となり、さらなる多様性の高まりでUWC ISAKの豊かさが増すのが楽しみです。そして、私たちはUWCの恩恵を受けるだけでなく、貢献していくことをこの場で約束します」。小林は力強い言葉で締め括った。

UWC国際理事会の理事長であるジョン・ダニエル卿も晴れやかな笑顔で登壇した。「多様な価値観でお互いを認め合う教育を実践するUWC ISAKが加盟することは、UWCの活動に多くの好影響をもたらすでしょう。そして、小林りんさんのように、UWCの生徒だった人が新しいUWC校を設立することを誇りに思います」。

日本は、欠けていたピースの1つ

UWCは、第二次世界大戦への反省から国際的な相互理解を深めて世界平和に貢献する教育の実現を目指して1962年に設立されたNPO（非営利組織）だ。「教育を通じて人々や国や文化を結び、平和と持続可能な未来に貢献する」ために、多様性を重視。国籍や文化、人種、宗教、経済力などを一切差別することなく、世界中から生徒を選抜する。返済不要の奨学金を高い比

率で用意し、恵まれない地域で生活する才能あふれた子供に教育の機会を提供している。また、国際的に通用する大学受験資格「国際バカロレア」の設立にも関わっている。

UWC ISAKのUWC加盟を、UWCはどのように考えているのだろうか。UWC国際本部の部長であるイェンス・ウォーターマンは、「日本は国際社会において経済面で重要な役割を果たしてきた国であり、もし“教育国際連合”があれば間違いなく常任理事国となる存在だろう。その日本にUWC校がなかったことで、ピースが1つ欠けていたと思う」と話す。UWC国際本部は、UWCに加盟する17校、159の国・地域で生徒の募集や選考を実施する組織「ナショナルコミッティー」を取りまとめるUWCの中核機関だ。

日本は、UWCと無縁だったわけではない。実は、日本経済団体連合会（経団連）の支援を受けて、1972年にナショナルコミッティー「UWC日本協会」が設立されており、日本人生徒を世界各地のUWC校に送り込んできた。初代会長は当時の経団連会長だった植村甲午郎、2代目はソニー創業者の1人である盛田昭夫で、現会長は朝日生命保険最高顧問の藤田譲が務めている。

しかし、日本に学校ができるまでには至らなかった。その理由は、UWCから学校設立を働きかけることはせず、各地での自発的な動きに任せているためだ。今回、UWCピアソン・カレッジで学んだ小林が日本でUWC校を立ち上げるのは、「UWCの活動を世界に広めるうえで、最も理想的なあり方だ」（ウォーターマン）という。



「UWCの卒業生であれば、教育がもたらすインパクトを分かっているはず」と、UWC国際本部長のウォーターマンは言う

ウォーターマン自身、UWCピアソン・カレッジの卒業生である。その後、母国ドイツのヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学で法律を学び、アメリカのハーバード大学ケネディスクールを出た。大手出版社、経営コンサルティング会社を経て、「そろそろ教育に全精力を注ぐ時期」と判断して、UWCのメンバーになった。

外国人生徒が面食らった清掃活動

「UWC ISAKは、ほかのUWC校と比べると、アントレプレナーの集団という印象を受けます。だからこそ、社会と教育の断絶を埋めていくといった役割を期待しています。UWC理事会に参加する小林りん代表理事やロデリック・ジェミソン校長から、UWC ISAKの取り組みや日本の教育システムなどの話を聞くと、大いに刺激を受け、UWC自身の視点や文化が広がっていく」と、UWC ISAKをウォーターマンは高く評価する。

日本らしい取り組みを示す、分かりやすい一例が「STOP & CLEAN（ストップ・アンド・クリーン）」だろう。これは、昼食後の20分間、すべての作業を止めて校舎を掃除するという試み。生徒だけでなく、教員やスタッフも一緒になって清掃活動に従事する。日本の学校経験があれば、何の不思議もないことだろう。ところが、掃除に面食らう外国人の学生は少なくない。海外では清掃員任せで、自分で校舎をきれいにするという習慣がないからだ。

ウクライナのナショナルコミッティーを通じてUWC ISAKIに入学した11年生（高校2年生）のイリーナは、こう本音を明かす。「最初の1週間は、なぜ私が学校の掃除をしなければならないのか、まったく理解できなかった。でも今は、自分が学ぶ校舎に対する感謝の気持ちであると納得しました。自分の学校だから自分できれいにするという意識が芽生えました」。母国に帰国した際も、整理整頓が身についた娘の姿に、家族が驚いたそうだ。

「UWCは、設立から50年以上が経ち、ここ5年で6校が新たに加わるなど急激に拡大していることもあり、自分たちの教育方針が世界に貢献できる若者を輩出し続けるのにふさわしいのかを改めて考える節目に来ています。そこで、チェンジメーカー＝社会に変革が起こせるリーダーを教育で生み出すという私たちの取り組みや考え方が注目されています」。小林は、UWCからの期待をヒシヒシと感じているという。

そして、こう続ける。「海外から来る観光客の方から、『昔は“Seeing”で、その次は“Doing”、今は“Being”だ』と聞いた。座禅で自分と向き合うといった、文化に関心が高まっています。教育においても、必ずしも西洋の教育を輸入するのではなく、自分たちに見えている社会の景色に敏感であり、日本やアジアならではの価値観も取り入れながら、カリキュラムを考えていきたい」。